

中学生のインターネット利用の変化についての考察 － 3年間にわたる公立中学校 A の生徒へのアンケート調査に基づいて－

A Change in the Internet Use of Junior High School Students － Based on Questionnaire Results of A Junior High School over Three Years－

加藤 千枝

Abstract

In this study, we carried out a questionnaire survey to A Junior High School students to clarify the change of the Internet use over three years. First, it was made clear that students in fiscal 2014 used smart phones and music players to see web sites by χ^2 test, although 2012 students used personal computers and cell phones. Secondly, students in fiscal 2014 did not exchange messages by using e-mail compared with the others. Thirdly, although there was a tendency that the Internet use time per day increased year by year, it wasn't clear that students in fiscal 2014 actively used the Internet compared with the others.

キーワード：中学校(junior high school)／インターネット利用(Internet use)／
スマートフォン(Smart phone)／質問紙調査(questionnaire survey)

I 研究背景

本研究は公立中学校 A の生徒を対象に 3 年間継続して行ってきたアンケート調査から、中学生のインターネット利用の変化を明らかにするための探索的研究である。また、中学校 A は筆者が数年前から生徒や保護者、教員向けにネットの特性やネットを介したトラブル・事件の回避方法についての啓発活動をしている学校であるため、啓発活動が生徒のネット利用に与える影響についても併せて考察する。

1 中学生のネット利用の常態化と活発化

現在、多くの青少年がスマートフォンを始めとした自分専用のネット端末を所持し、ネットを利用していることは複数の先行研究より明らかとなっている(内閣府 2013等)。それは、これまで高校生と比較してネット端末の所持率が低かった中学生にも該当することで、内閣府(2013)が全国

の満10～17歳3,000名の青少年とその保護者3,000名を対象に行った調査によると、中学生のスマートフォン所持率が年々増加しているというデータが示されていた。一方で、フィルタリング導入の有無については、デジタルアーツ(2013)が株式会社マクロミルの会員である10～18歳の青少年と10～18歳の青少年を末子に持つ保護者の1,236名を対象に行ったネット調査によると、全体的な傾向としてフィルタリングの利用者が年々減少していることが明らかとなった⁽¹⁾。上記より、中学生は数年前よりも現在の方が早い段階からスマートフォンを始めとしたネット端末を所持し、フィルタリングを導入していない状態でネット利用をしていることが考えられる。

中学生のネット利用が年を経るごとに盛んになりつつあるという全体的な傾向は明らかとなったが、一方で、彼・彼女らがどのくらいの頻度で、どのようなサイトやサービスを利用しているのか、以前と比較して利用しているサイトやサービスに変化は見られるのかといった点については、未だ明らかとなっていない。それゆえ、本研究第一の

KATO, Chie

北陸学院大学 非常勤講師
キャリア教養講座 I・II・III

目的として、中学生のネット利用の具体的な変化について明らかにする。

2 ネット利用の活発化とネットを介した出会い経験の有無

早い段階からフィルタリングが導入されていないネット端末を利用することで、中学生を始めとした青少年はネット上の様々なサイトやサービスに接する機会が必然的に増えると思われるが、その結果、ネットを介した出会いを実現させる者も増えることが予想される⁽²⁾。しかしながら、先行研究ではネットを介した出会い経験の有無について年度間の比較を行ったものはほとんどなく、その傾向について言及することは現時点で難しい。ちなみに、先に挙げたデジタルアーツ(2013)の調査では、中学生は「LINE」、高校生は「twitter」でネットを介した出会いを実現させているとしていた。「LINE」は2011年6月に開始されたサービスであるため、数年前の中学生で「LINE」を介して出会いを実現させる者はほとんどいなかったと思われる。それゆえ、当時の中学生はネットを介した出会いを実現させるために、「LINE」以外のサービスを用いていたことが予想されるが、「LINE」を始めとしたインスタント・メッセージング(以下、IMとする)の登場によって、中学生がネットを介した出会いを実現させる機会が拡大したとも言える⁽³⁾。つまり、複数のサイトやサービス(とりわけIM)の登場により、中学生を始めとした青少年がネットを介した出会いを実現させ易い環境が整いつつあるため、ネットを介した出会い経験者も増加傾向にあることが予想される。

3 ネット利用の活発化に対する市民活動の成果

青少年のネット利用が年を経るごとに盛んになりつつあり、利用しているサイト・サービスもそれに伴い変化している可能性について言及したが、そのような状況に危機感を抱き、生徒や保護者、教員を対象としたネットモラルやリスクに関する講習会を定期的開催している地域もある。

例えば群馬県高崎市では、地域の保護者が青少年のネット利用の実態を勉強し、県の認定を受けた後に学校や地区単位で行われる講習会において他の保護者にそれを伝えるという市民活動が行わ

れている(片山 2011)。また地元のNPOが保護者らの活動を支える為のデータベース(CISS-Civil Instructor Support System)を立ち上げ、一定のセキュリティを確保した後、青少年のネット利用の実態把握に役立てている。そのような市民活動の成果が、一部のアンケート調査結果にも表れている。例えば伊藤(2012)が、高崎市の小中学生3,390名とその保護者3,207名(小学6年生1,701名、中学1・2年生1,689名)を対象に行ったアンケート調査によると、「子どもの携帯電話」にフィルタリングを導入していると回答した保護者は64.7%であった(小学生68.8%、中学1年生62.5%、中学2年生62.7%)。フィルタリングとは青少年が有害情報を受信しないよう、それらを遮断する為の機械的な仕組みであるが、フィルタリング導入の有無がネット利用に対する青少年や保護者意識の高さを測る一つの指標になると言えよう。同時期に行われた内閣府(2013)の調査では、「自分専用の携帯電話」にフィルタリングを導入していると回答した小学生は35.3%で、中学生は48.4%であった。これらの数値はいずれも、高崎市で行われた調査より低い数値となっており、これは市民活動の一つの成果として捉えられる。内閣府(2013)の調査はフィルタリング導入の有無を青少年自身に尋ねている為、伊藤(2012)の調査結果と直接比較・検討することはできないが、参考にはなる。上記より、市民活動は青少年の過剰なネット利用に歯止めをかけることが期待される。しかしながら、携帯電話ではなくスマートフォンを所持することにより、1日当たりのネット利用時間が増加すると複数の調査において指摘されているため(楽天リサーチ 2012等)、保護者の努力がある一方で、全体的な傾向としては、やはり中学生のネット利用は活発化していることが予想される。

4 本研究の目的

先行研究を踏まえ、本研究では中学生を対象としたアンケート調査から、ネット利用の変化について言及する。中学生を調査対象とする理由は、高校生と比較して、ネット端末を所持していない者も多く、ネット利用の変化が最も顕著に見られる年代であると判断したためである。また、調査

対象となる中学生についてであるが、筆者が生徒や保護者、教師向けにネットモラル・リスク教育（啓発活動）を3年間継続してきた公立中学校Aの生徒を対象とする。それにより、中学生のネット利用の変化に対する継続的な啓発活動がどのような意義を持つのかという点についての考察が可能になり、今後の啓発活動に生かすことができると考えたからである。

II 方法

1 調査対象者

関東地方の公立中学校Aの全校生徒を対象に、2013（H24年度）～2015（H26年度）年の1月上旬から中旬にかけてアンケート調査をした。H24年度は415名から（有効回答率93.0%）、H25年度は411名から（有効回答率91.1%）、H26年度は422名から（有効回答率92.1%）有効回答を得た。

2 質問項目

本調査における質問項目は、群馬大学社会情報学研究センター（2010）で実施されたアンケート調査の項目を参考にして作成されたものである⁽⁴⁾。なお、H25年度とH26年度はネットを介して会った人数と相手の職業についても尋ねている。

3 手続き

アンケート用紙の冒頭に個人情報保護及び研究参加の任意性を紙面上で説明し、協力者から調査実施の同意を得た上で実施した。また、用紙の回収は中学校Aの教員にお願いした。

4 分析方法

生徒にはマークシートでの回答を依頼し、得られた回答はMicrosoft Office Excelを用いて単純集計を行った後、詳細な分析についてはAddinsoft社のXLSTATを利用した。なお、全ての検定において有意水準 $\alpha=5\%$ とする。

III 結果

1 利用しているネット端末

利用しているネット端末について複数回答で尋ねた。表1は各年度と利用しているネット端末についてのクロス集計表である。 χ^2 検定の結果、人

数の偏りは有意であった（ $\chi^2(16)=106.16, p<.01$ ）。併せて残差分析を行った結果、表2に見られるように、H24年度は「自分携帯」を利用する者が有意に多く、H26年度は有意に少なかった。また、H24年度は「自分スマホ」を利用する者が有意に少なく、H26年度は有意に多かった。

表1 利用しているネット端末
有効回答2092

	H24年度	H25年度	H26年度
自分携帯	87	36	25
家族携帯	30	29	24
自分スマホ	77	125	144
家族スマホ	40	86	93
自分PC	33	29	22
家族PC	211	242	203
音楽プレイヤー	49	72	82
その他	57	95	89
利用していない	34	37	41
計	618	751	723

表2 調整された残差

(* * p<.01 * p<.05 † p<.10 ns 有意差なし)

	H24年度	H25年度	H26年度
自分携帯	8.09 * *	-3.05 * *	-4.69 * *
家族携帯	1.35 ns	-0.19 ns	-1.10 ns
自分スマホ	-3.25 * *	0.10 ns	3.02 * *
家族スマホ	-3.87 * *	1.10 ns	2.60 * *
自分PC	2.00 *	-0.27 ns	-1.65 †
家族PC	1.78 †	0.64 ns	-2.35 *
音楽プレイヤー	-1.78 †	-0.14 ns	1.84 †
その他	-2.13 *	1.21 ns	0.82 ns
利用していない	0.20 ns	-0.65 ns	0.47 ns

2 フィルタリング導入の有無

表3は各年度とフィルタリング導入の有無についてのクロス集計表である。全体的な傾向として、利用しているネット端末にフィルタリングが導入されているか「わからない」と回答した者が最も多かった。 χ^2 検定の結果、人数の偏りは有意でなかった($\chi^2(4)=5.20$, ns)。また、表4はH24年度に1年生、H25年度に2年生、H26年度に3年生であった生徒のフィルタリング導入の有無についてのクロス集計表である。 χ^2 検定の結果、人数の偏りは有意であった($\chi^2(4)=10.07$, $p<.05$)。

表3 フィルタリング導入の有無 (%)
有効回答 1136

	H24年度	H25年度	H26年度
導入している	114 (29.9)	130 (34.8)	111 (29.1)
導入していない	54 (14.2)	51 (13.6)	67 (17.6)
わからない	213 (55.9)	193 (51.6)	203 (53.3)
計	381 (100)	374 (100)	381 (100)

表4 フィルタリング導入の有無 (%)
有効回答 389

	H24年度 1年生	H25年度 2年生	H26年度 3年生
導入している	26 (20.2)	39 (30.5)	40 (30.3)
導入していない	21 (16.3)	17 (13.3)	30 (22.7)
わからない	82 (63.6)	72 (56.3)	62 (47.0)
計	129 (100)	128 (100)	132 (100)

表5 調整された残差

(* * p<.01 * p<.05 † p<.10 ns 有意差なし)

	H24年度 1年生	H25年度 2年生	H26年度 3年生
導入している	-2.14 *	1.08 ns	1.05 ns
導入していない	-0.44 ns	-1.53 ns	1.95 †
わからない	2.25 *	0.20 ns	-2.43 *

併せて残差分析を行った結果、表5に見られるように、H24年度は「わからない」と回答した者が有意に多く、H26年度は有意に少なかった。

3 1日当たりのネット利用時間

表6は各年度と1日当たりのネット利用時間についてのクロス集計表である。全体的な傾向として、1日当たりのネット利用時間が「30分未満」の者が年を経るごとに減少し、「3時間以上」の者が年を経るごとに増加していた。 χ^2 検定の結果、人数の偏りは有意であった($\chi^2(8)=37.77$, $p<.01$)。併せて残差分析を行った結果、表7に見られるように、H24年度は「30分未満」の者が有意に多く、H26年度は有意に少なかった。一方、H26年度は「2～3時間未満」の者が有意に多かった。

表6 1日当たりのネット利用時間 (%)
有効回答 1136

	H24年度	H25年度	H26年度
30分未満	113 (29.7)	89 (23.8)	67 (17.6)
30分～ 1時間未満	96 (25.2)	77 (20.6)	68 (17.8)
1～2時間 未満	84 (22.0)	84 (22.5)	89 (23.4)
2～3時間 未満	35 (9.19)	45 (12.0)	68 (17.8)
3時間以上	53 (13.9)	79 (21.1)	89 (23.4)
計	381 (100)	374 (100)	381 (100)

表7 調整された残差

(* * p<.01 * p<.05 † p<.10 ns 有意差なし)

	H24年度	H25年度	H26年度
30分未満	3.37 **	0.07 ns	-3.43 **
30分～ 1時間未満	2.33 *	-0.36 ns	-1.97 *
1～2時間 未満	-0.33 Ns	-0.09 ns	0.42 ns
2～3時間 未満	-2.73 **	-0.70 ns	3.43 **
3時間以上	-3.35 **	1.00 ns	2.36 *

4 1日当たりのメール送受信数

表8は各年度と1日当たりのメール送受信数についてのクロス集計表である。全体的な傾向として、1日当たりのメール送受信数が「10通未満」の者が年を経るごとに増加していた。 χ^2 検定の結果、人数の偏りは有意であった ($\chi^2(10)=56.61, p<.01$)。併せて残差分析を行った結果、表9に見られるように、H24年度は1日当たりのメール送受信数が「50通以上」の者が有意に多く、H25・26年度は「10通未満」の者が有意に多かった。

表8 1日当たりのメール送受信数 (%)
有効回答 1136

	H24年度	H25年度	H26年度
10通未満	219 (57.5)	292 (78.1)	295 (77.4)
10～19通	55 (14.4)	35 (9.36)	27 (7.09)
20～29通	30 (7.87)	18 (4.81)	14 (3.67)
30～39通	22 (5.77)	10 (2.67)	17 (4.46)
40～49通	13 (3.41)	6 (1.60)	8 (2.10)
50通以上	42 (11.0)	13 (3.48)	20 (5.25)
計	381 (100)	374 (100)	381 (100)

表9 調整された残差

(* * p<.01 * p<.05 † p<.10 ns 有意差なし)

	H24年度	H25年度	H26年度
10通未満	-7.10 **	3.71 **	3.42 **
10～19通	3.26 **	-0.73 ns	-2.53 *
20～29通	2.55 *	-0.67 ns	-1.88 †
30～39通	1.72 †	-1.91 †	0.18 ns
40～49通	1.63 ns	-1.20 ns	-0.44 ns
50通以上	4.26 **	-2.97 **	-1.30 ns

5 利用しているサイト・サービス

利用しているサイト・サービスについて複数回

答で尋ねた。表10は各年度と利用しているサイト・サービスについてのクロス集計表である。 χ^2 検定の結果、人数の偏りは有意であった ($\chi^2(12)=95.06, p<.01$)。併せて残差分析を行った結果、表11に見られるように、H24年度は「SNS」を利用する者が有意に多く、H25・26年度は「IM」を利用する者が有意に多かった。

表10 利用しているサイト・サービス
有効回答 1136

	H24年度	H25年度	H26年度
掲示板	15 (3.94)	9 (2.41)	7 (1.84)
ホームページ ⁽⁵⁾	13 (3.41)	7 (1.87)	7 (1.84)
SNS	91 (23.9)	29 (7.75)	39 (10.2)
IM	60 (15.7)	122 (32.6)	127 (33.3)
動画	142 (37.3)	125 (33.4)	151 (39.6)
その他	14 (3.67)	28 (7.49)	27 (7.09)
利用していない	46 (12.1)	54 (14.4)	23 (6.04)
計	381 (100)	374 (100)	381 (100)

表11 調整された残差

(* * p<.01 * p<.05 † p<.10 ns 有意差なし)

	H24年度	H25年度	H26年度
掲示板	1.78 †	-0.47 ns	-1.31 ns
ホームページ	1.63 ns	-0.78 ns	-0.85 ns
SNS	6.82 **	-4.25 **	-2.60 **
IM	-6.16 **	2.88 **	3.30 **
動画	0.24 ns	-1.65 †	1.41 ns
その他	-2.41 *	1.40 ns	1.02 ns
利用していない	0.96 ns	2.74 **	-3.69 **

6 ネットを介した出会い経験の有無

表12は各年度とネットを介した出会い経験の有無についてのクロス集計表である。全体的な傾向として、各年度共に出会い経験「なし」と回答した者が多かった。 χ^2 検定の結果、人数の偏りは有意でなかった($\chi^2(2)=2.01, ns$)。また、表13はH24年度1年生、H25年度2年生、H26年度3年生とネットを介した出会い経験の有無についてのクロス集計表である。 χ^2 検定の結果、人数の偏りは有意でなかった($\chi^2(2)=0.82, ns$)。加えて、H25・26年度はネットを介した出会い経験のある生徒に対して、これまでに会った人数を単数回答で求め、相手の職業については複数回答で求めた。その結果は表14・15の通りである。

表12 ネットを介した出会い経験の有無 (%)
有効回答 1136

	H24年度	H25年度	H26年度
なし	322 (84.5)	308 (82.4)	328 (86.1)
あり	59 (15.5)	66 (17.6)	53 (13.9)
計	381 (100)	374 (100)	381 (100)

表13 ネットを介した出会い経験の有無 (%)
有効回答 389

	H24年度 1年生	H25年度 2年生	H26年度 3年生
なし	108 (83.7)	103 (80.5)	105 (79.5)
あり	21 (16.3)	25 (19.5)	27 (20.5)
計	129 (100)	128 (100)	132 (100)

表14 ネットを介して会った人数
有効回答119

人数	H25年度	H26年度
3人以下	25	18
4～6人	16	16
7～9人	6	4
10人以上	18	15
無回答	1	0
計	66	53

表15 ネットを介して会った相手の職業
有効回答 119

職業	H25年度	H26年度
異性の中学生	20	25
同性の中学生	32	30
異性の高校生	7	5
同性の高校生	7	9
異性の大学生・専門学校生	2	4
同性の大学生・専門学校生	3	4
異性の社会人	3	4
同性の社会人	6	4
わからない	2	4
計	82	89

IV 考察

本研究では継続的にネットモラル・リスク教育をしている中学校Aの生徒を対象にアンケート調査をした。その結果、中学校Aの生徒のネット利用が変化していることが明らかとなった。具体的には以下の項目で言及する。

1 利用しているネット端末の変化

本研究の結果から、中学校Aの生徒が利用しているネット端末の変化が明らかとなった。具体的にH24年度は「自分携帯」からネットを利用していると回答した者が有意に多かったが、H25・26年度は有意に少なく、H26年度は「自分スマホ」からネットを利用している者が有意に多かった。これは内閣府(2013)やデジタルアーツ(2013)の調査でも指摘されている。上記の結果が得られた理由として第一に、携帯電話会社が販売しているネット端末が従来の「携帯電話」ではなく「スマートフォン」が中心であるということ、第二に、「LINE」や「comm」など「IM」の特性を生かすためには「スマートフォン」からのネット利用の方が望ましいことが挙げられる。本研究の結果より、H25・26年度は「IM」を利用している者がH24年度より有意に多かったことから、それに併せて利用しているネット端末も変化したということ、ネット端末の変化が更に「IM」の利用を促したという両面が考えられる。

2 1日当たりのメール送受信数の減少とネット利用時間について

結果より、中学校Aの生徒に関して1日当たりのメール送受信数は減少していた。その理由として、やはり「IM」の広まりが考えられる。つまり、中学校Aの生徒は従来のメールアドレスを用いたメッセージでのやりとりではなく、「IM」を用いてメッセージをやりとりするようになったため、上記のような結果が得られたと言える。

一方、1日当たりのネット利用時間は増加していることが明らかとなった。1日当たりのメール送受信数は減少していることから、中学校Aの生徒はアドレスを用いたメール交換に時間を費やしているわけではなく、それ以外の利用に時間を費やしていると言える。最も考えられるのが、ネット上のサイト・サービス利用に時間を費やしているということだ。具体的に、H26年度ではサイト・サービス自体「利用していない」と回答した者が有意に少なく、「IM」を利用していると回答した者が有意に多かった。上記より、2年前よりもネット上のサイト・サービスを利用することが当たり前となり、むしろ、利用しなければならない状況に生徒たちが追い込まれているとも考えられる。特に、代表的な「IM」の一つである「LINE」は即時性だけでなく、応答性、操作性などが長けているため、既存の電話やメールの代替として、家族や友人・知人との連絡手段として重宝されている（高校や大学ではクラスやゼミ、部活の連絡手段として使われている例も多い）。また、「LINE」の機能の一部として「既読機能」があるが、「既読機能」により相手に即座にレスポンスをしなければならないと義務感を抱く者もいるであろう（加藤，2013）。以上のような「LINE」を始めとした「IM」の特性により、1日のネット利用時間が増加したと考えられる。

3 フィルタリング導入の効果

利用しているネット端末が「携帯電話」から「スマートフォン」に変化し、利用しているサイト・サービスも年々変化する中で、青少年をネット上の有害情報から守るための機械的な仕組みであるフィルタリング導入について考察する。年度間での比較では、フィルタリング導入の有無について

有意差はなかったが、H24年度1年生のフィルタリング導入の有無について3年間の変化を検討した結果、有意差があった。具体的には、自身が最もよく利用するネット端末にフィルタリングが導入されているか「わからない」と回答した者がH26年度は有意に少なく、「導入されていない」と回答した者が有意に多い傾向であった。筆者はH22年度から中学校Aにて啓発活動をしているが、生徒だけでなく保護者や教師に対してもフィルタリングの意味と導入の必要性について継続的に説明してきた。そのため、フィルタリングが導入されているか「わからない」と回答した者がH26年度はH24年度に比べて有意に少なかったと言える。しかし、講習会でフィルタリング導入の必要性について言及している一方で、「導入されていない」と回答した者がH26年度は有意に多い傾向であったので、その必要性が中学校Aの関係者に十分伝わっていないことが考えられる。また、H24年度とH26年度では生徒が利用するネット端末に変化が見られたため、それがフィルタリング導入の有無に影響を与えている可能性がある。特に「スマートフォン」の場合、フィルタリングを導入していた場合でも有害情報への接続を防ぐことは「携帯電話」以上に難しいし（安心ネットづくり促進協議会，2012）、無料のサイト・サービスを利用するためにはフィルタリングを解除しなければならない場合もあるので、利用するネット端末の変化により、上記の結果が得られたことも考えられる。いずれにしても、今後中学校Aで実施する講習会の内容を見直し、ネットを利用する場合はフィルタリングが導入された端末を利用することが、生徒自身のためであることを強調していきたい。

4 ネットを介した出会い経験の有無と出会いを繰り返し実現させることの意義

利用しているネット端末やサイト・サービスの変化により、ネットを介した出会い経験者が増加すると予想したが、中学校Aの場合、年度間で有意差は見られなかった。その理由として、先に言及した啓発活動の成果が挙げられる。ネットを介した出会いを実現させることで理想的なパートナーに巡りあえる場合もあるが、一方でトラブル

や事件などに巻き込まれるきっかけにもなり得るので(警察庁 2014)、今後も中学校 A の関係者に対してネットを介した出会いのリスクを啓発活動の中で伝えていくべきだと考える。

しかしながら、啓発活動をしてネットを介した出会いを実現させる者は一定数おり、かつ、H25・26年度の結果より、それらの者は1度だけでなく何度もネットを介した出会いを実現させていることから、一部の者にとってはネットを介した出会いを実現させるリスクよりもメリットの方が大きいことが考えられる。富田(2006)はメディア上に成立する匿名で親密な他者をインティメイト・ストレンジャーと称し、匿名であるからこそ、相手と親密になれると指摘している。メディア上で匿名であるということは、相手の顔が見えないからこそ本音を話すことができ、親しくなれる一方で、相手の目の前から即座に姿を消し、いつでも関係の切断が可能ということの意味する。それゆえ、匿名でありながら相手との関係が継続するとき、そこで生まれる親密さは急速に深まると富田(2006)は指摘する。また、いつでも関係の切断が可能で匿名であるということは、性や死といった対面でのやりとりが敬遠されがちな内容であっても、ネット上のインティメイト・ストレンジャーに対してであれば気にせず話題にすることができると考えられる。以上の理由から、一部の者はネットを介した出会いを繰り返し実現させていると思われる。

V 総合考察

本研究では中学校 A の生徒を対象としたアンケート調査結果からネット利用の変化について明らかにし、かつ、啓発活動の意義について言及した。アンケート調査の結果から、3年間で中学校 A の生徒のネット利用は確実に変化しており、具体的な項目として利用しているネット端末やサイト・サービス、1日当たりのメール送受信数が挙げられた。また、有意差は見られなかったものの集計表からは、1日当たりのネット利用時間について「3時間以上」と回答した者が若干増加しており、今後継続的に調査をしていく必要がある。

加えて、H24年度と H25年度にフィルタリング導入の有無について生徒に尋ねたところ、H24年

度に比べて H25年度は「導入している」と回答した者が若干増えたが、有意差は見られなかった。また、依然としてフィルタリング自体が「わからない」と回答した者が多数いた。フィルタリングについては保護者や教員向けは勿論、生徒向けの啓発活動の中でも取り上げ、その必要性について話をしているが、それが生徒に十分伝わっていないことが考えられる。それゆえ、今後の啓発活動における課題と言える。

最後に、本研究は中学校 A に限定された調査であるため、ネット利用の変化が中学校 A 特有のものであることが考えられる。しかしながら、先行研究において大規模調査は既に何度も行われているが、3年間にわたる特定の学校、かつ、ネットモラル・リスク教育を継続して行っている学校のネット利用の変化について言及した論文は少ないので、本研究で論じる意義はあったと考える。今後の課題として、個人情報に留意し、学校からの理解を得た上で、啓発活動が積極的に行われていない他校と中学校 A のネット利用の比較を行うことも検討している。

謝辞

本論文の作成にあたり、金沢大学 田邊浩教授にご指導いただきました。ここに感謝の意を表します。

付記

本研究は2014年社会情報学会(SSI)学会大会にて発表した内容を改変したものである。具体的には分析をし直し、結果と考察を中心に修正・加筆した。

〈註〉

- (1) 株式会社マクロミルはインターネット調査会社であるため、その会員のインターネット・リテラシーは平均よりも高いことが予想される。それゆえ、マクロミル会員に対する調査結果を一般化することは難しいが、青少年のネット利用の傾向を把握する上で参考になるとと思われる。
- (2) 本研究において、ネットを介した出会いとは加藤(2012)の定義を基に、異性・同性を問わず、ネット上のサイト・サービスを介して見知らぬ者同士

が知り合い、直接会うことを意味する。偶然・必然を問わず、また、1対n、n対nでの出会いも対象とする。

- (3) 「LINE」や「comm」を「SNS」として捉える研究もあるが、「IM」機能を中心として発展したサイト・サービスであるため、本研究は「LINE」や「comm」を「IM」として扱う。
- (4) 質問項目は以下の通りである。なお、紙面の関係上、一部省略する。本研究では先行研究の分類を基に、「グリー」「モバゲー」「ミクシィ」「ツイッター」「アメーバ(ピグ)」「フェイスブック」を「SNS」, 「LINE」「comm」を「IM」, 「You Tube (ユーチューブ)」「ニコニコ動画」を「動画」として集計した。
- (5) ホームページとは自己紹介や掲示板、日記、私書箱など複数の機能を備えたネット上のサービスである。

質問項目 (レイアウトは変更してある)

1. あなたはどの道具からインターネットに接続していますか。あてはまるものを全て選んでください。

- ①自分専用の携帯電話 (スマートフォンを除く)
 ②家族の携帯電話 (スマートフォンを除く)
 ③自分専用のスマートフォン ④家族のスマートフォン ⑤自分専用のパソコン ⑥家族のパソコン ⑦音楽プレーヤー (iPod touch など) ⑧その他のインターネット機器 ⑨インターネットは全く利用していない→その理由を教えてください

2. あなたが最もよく利用している、インターネットに接続するための道具にはフィルタリングが導入されていますか。いずれかを選んでください (H24・25年度のみ)。

- ①導入されている ②導入されていない ③わからない

3. あなたはインターネットを一日平均何時間くらい利用していますか (携帯電話・スマートフォン・パソコンなどの利用時間の合計)。いずれかを選んでください。※Eメールをしている時間も含まれます。

- ①30分未満 ②30分～1時間未満 ③1時間～2時間未満 ④2時間～3時間未満 ⑤3時間以上

4. あなたは (携帯電話・スマートフォン・パソコンなどから) Eメールを一日平均何通くらい送受信していますか (ショートメールを除く)。いずれかを選んでください。

- ①10通未満 ②10～19通 ③20～29通 ④30通以上

5. 以下のサイト・アプリの中で現在あなたが利用しているものはありますか。あてはまるものを全て選んでください。

- ①掲示板 ②プロフ ③ホームページ (簡易ホームページ) ④チャット ⑤ブログ ⑥グリー ⑦モバゲー ⑧ミクシィ ⑨ツイッター ⑩アメーバ (ピグ) ⑪フェイスブック ⑫ライン ⑬comm (コム) ⑭リアルタイム ⑮You Tube (ユーチューブ) ⑯ニコニコ動画 ⑰占いサイト ⑱プリクラサイト ⑲その他 ⑳現在サイトは全く利用していない

6. あなたはこれまでネットで知り合った人と実際に会ったことがありますか。いずれかを選んでください。また、会ったことがある人は、人数と会った相手のことについても教えてください (H25年度のみ)。

- ①ない ②ある
 →人数【一つ選択】①3人以下 ②4～6人 ③7～9人 ④10人以上
 →相手【複数選択】①異性の中学生 ②同性の中学生 ③異性の高校生 ④同性の高校生 ⑤異性の大学・専門学校生 ⑥同性の大学・専門学校生 ⑦異性の社会人 ⑧同性の社会人 ⑨その他 ⑩わからない

〈参考文献〉

安心ネットづくり促進協議会 2012「青少年保護・バイ・デザイン及び利用者のインターネット・リテラシー向上に向けて」

〈<http://www.good-net.jp/investigation>〉 Accessed January 8 2014

デジタルアーツ 2013「未成年の携帯電話・スマートフォン使用実態調査」

〈http://www.daj.jp/company/release/data/2013/091001_reference.pdf〉 Accessed January 8 2014

伊藤賢一 2012「青少年のモバイル・インターネット利

- 用に対する保護者のリスク認知—群馬県高崎市調査より—」『群馬大学社会情報学部論文集』, 19, pp. 1-15
- 片山雄介 2011 「『ネットの見守り』活動の内容と意義」『ヒューマンインタフェース学会誌=Journal of Human Interface Society : human interface』, 13 (2), pp.77-80
- 加藤千枝 2012 「青少年女子のインターネットを介した出会いの過程—女子中高生15名への半構造化面接結果に基づいて—」『社会情報学』, 2 (1) pp.45-57
- 加藤千枝 2013 「青少年のLINE利用の実態に関する探索的研究：高校生のLINE利用に伴う肯定的・否定的経験に基づいて」『社会情報学会 (SSI) 学会大会研究発表論文集』, pp.113-118
- 警察庁 2014 「平成26年上半期の出会い系サイト及びコミュニティサイトに起因する事犯の現状と対策について」
〈<http://www.npa.go.jp/cyber/statics/h26/pdf02-1.pdf>〉
Accessed 2014, November 8
- 内閣府 2013 「青少年のインターネット利用環境実態調査」
〈<http://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/h24/net-jittai/html/index.html>〉 Accessed January 8 2014,
- 楽天リサーチ 2012 「スマートフォンの使用実態に関する調査」
〈<http://research.rakuten.co.jp/report/20120524/>〉 Accessed 2014, January 8
- 富田英典 2006 「ケータイとインティメイト・ストレンジャー」『ケータイのある風景』北大路書房